

光

hikari

光の子どもの家 自立進学基金



hikari

光の子どもの家 自立進学基金

〒349-1155 埼玉県加須市砂原 277

TEL 0480-72-3883 FAX 0480-72-6649

<http://www.hikarinokodomonoie.com>



1

Vol. 1
ござんない

光

hikari

光の子どもの家 自立進学基金



CONTENTS

- 4 eyepiece 卷頭言……………「自由研究」ということ 芹沢 俊介
- 8 stella conversation 対話……………「子どもに必要とされる保育士になりたい」
育美と竹花の対話
- 16 afterglow エッセイ……………「余光」菅原 哲男
- 18 financial report 会計報告……………「感謝と共に」鈴木 洋一
- 20 twinkle light シリーズ……………「かくれんぼ」童謡のきらめき
- 22 jiritsu shingaku kikin……………自立進学基金 皆様へのお願い

「自由研究」ということ

芹沢 俊介(光の子どもの家 自立進学基金代表)

「自分研究」という言葉がある。1999年開設されて以来、月に一度のペースでかかわり続けてきたシューレ大学の学生たちが生み出したものだ。

シューレ大学というと、一般大学をイメージするかも知れないが、いわゆる大学ではない。いわゆる大学ではないから試験もなければ、入学のための高卒の資格もいらない。年齢の壁もない。進級や卒業のために履修すべき必須の単位もない。卒業したからといって学位がもらえるわけでもないのだ。それでも大学という名を冠しているのは、そこが若い人たちにとって主体的な学びの場であることによる。

シューレ大学の学生には、「不登校」体験という共通項がある。それゆえに、ほとんどの学生は集団や

他者に対する不信感、恐怖感、忌避感情を抱いている。そういう彼ら彼女らが「自分研究」という研究テーマを創造し、積極的に取り組んできたのである。

たとえば、「悩みをどうしたらいいのか分らない私」は、あるとき「どうしたらいいか分らない私の悩みを研究」対象にしてみようと思い立つ。そして、思い立ったそのテーマを、他の学生たちの前で宣言するのである。宣言することによって、自らの研究過程、迷いの過程を他者に公開し、感想や意見を聞き、さらに研究を深めてゆく、そのように進行するのだ。かといって共同研究ではない、研究主体はあくまで本人である。

学生たちは、他者と共にいても、自分が探究したいことや表現したいことを見失わないでいられるこ

とを知る。自らの拒食症体験を研究し、拒食症理解にこれまでにならない大きな貢献をもたらした女性がいる。彼女は、自分の拒食症についての情報を秘匿しておくよりも、

オープンにすることによって、逆により自分の精神や身体が自由になるのを感じることができた、と述べる。





このように「自分研究」の特徴は、自分ひとりで研究するのではないのである。自分研究は実は、人と一緒という感覚でもって深められていくということ。この場合の一緒は、集団の中でという意味とはまるで違うことは明らかと思う。

ただし、他者に研究過程を共有してもらうためには、その彼ら彼女らが安心の対象である必要がある。これは簡単ではない。学生たちは人よりも強く、集団や他者に対する不信感、恐怖感、忌避感情を抱いているからである。

学生たちは、そうした自分を自覚しつつ、できるかぎりお互いに気持ちを開いて、話し合う努力がなされている。話し合うことで、お互いそれぞれが安心し、それを軸に自分を

探究したり表現をしたりできるようになるのである。

学生の一人は、こう語る。希望は自らで作り出すものだという認識を、「自分研究」は、もたらしてくれたのである、と。

Profile -文芸社会評論家。1942年、東京生まれ。上智大学経済学部卒業。40年にわたって家族、子ども、女性、犯罪、新宗教、死などをテーマに批評を書き続ける。1998年から横浜にて児童養護施設、知的障害者施設の施設長らと養育論の再構築を目指した「養育を語る会」を始める。著書に、「母という暴力」(春秋社)、「現代(子ども)暴力論」(春秋社)、「引きこもるという情熱」(雲母書房)、「若者は何故殺すのか」(小学館新書)、「親殺し」(NTT出版)、「もういちど親子になりたい」(主婦の友社)など多数。

子どもに必要とされる保育士になりたい

育美(仮名)は、光の子どもの家で暮らしながら、保育士を目指して短大の幼児保育学科2年に在学中です。幼稚園の実習中に忙しい育美と職員の私、竹花が心と心の対話をしました。

卒論は童謡がテーマ

■竹花：実習大変だよね。ピアノの苦手な育美が進級できて驚いたし、ドレミもよくわからないで幼児保育学科を選んで心配もした。でもピアノを一曲一曲克服する努力っていうのはすごかった。もう卒業を遮るものはないでしょ？

◆育美：卒論…。

■竹花：何について書くの？

◆育美：『童謡は子どもたちの言語獲得につながるか』

■竹花：へーー。育美は童謡すごく好きだったよね。「ゆーきやこんこん」って、ものすごく繰り返してエンドレスで歌ってた。

◆育美：覚えてる！好きだったよね。

保育士の道であってたみたい

■竹花：自分が決めた方向に不安はない？

◆育美：いや、今まで不安しかなかったかな。保育士を目指すことを反対

されても押し切ってここまできた。自分で言ったんだから、言ったことはやり通すって思っている人間だし。

■竹花：やり通しそうだよね、本当にね。

◆育美：迷った時期もあったし学校行かなかっだし、自分は保育士に向かないんじゃないからって思ったこともあった。でも結局、就職を考えている保育園で初めて子どもたちと毎日関わって楽しいなと思えたし、今も別に苦じゃないし。実習で辛いのは日誌を書くことぐらいで、子どもに関しては別に何もないし。最近は、少しはこの道であってたのかなって思えるようになんたかな。

■竹花：自分で決めたことはやろうとする？

◆育美：うん、最後までやるかな。

子どもに必要とされたい

■竹花：育美は保育士になる目標を持っているけど、どういう保育士になりたいですか？

◆育美：どういう？子どもから必要とされれば良いんじゃない？結局それを

評価するのは子どもとの関係じゃない。大人より子どもとの関係じゃないかって思うかな。たとえば、怒られるにしてもこの人の話は聞くとかあるじゃない。怖いから話を聞くんじゃないで、怖くても子どもが寄ってくるその人と子どもとの関係ってすごいなって思う。

乳児院から続く人間関係

■竹花：うちにきて15年かー、お疲れ様でした。4歳の時にきてから5人の担当の保育士が変わったことを育美はどう思ってる？

◆育美：同じくらい一緒にいる子に比べてもたぶん少ない方だし。

■竹花：担当さんとの関係は今でも続いているし。何よりも驚くのは乳児院の保育士さんが育美がここにきてから何度も寄ってくれているよね。事務の人は家族ぐるみでお付き合いしてるし、人間関係がずっと続いているのはすごい。

◆育美：そうだね。

人を信頼するのが苦手

■竹花：担当さんがいなくなるということについては他にも仲間がいたし、説明してもらったり納得したってことかな？

◆育美：いや、今までの信頼関係すべてがなくなつたって思うんだろうね。だからたぶん未だに人間が嫌いなんだよ。

■竹花：担当替えして信頼関係はなくなったと思ったらやうわけ？

◆育美：思うね。

■竹花：だけども今でも関係は続いている。ちょっとそこら辺が矛盾しているって感じするよね。

◆育美：だから結局、信頼っていうものが苦手かな。

■竹花：どうせ信頼しても消えちゃうんじゃないかなって？

◆育美：そうそう、絶対思った。そう思いながら生活してた。今は仕事だからしようがないってわかるけど、子どもにしてみれば信頼が消えると言うか、だんだん替わることに慣れてくのはあつた。泣いている子を見て、担当が替わってなんで泣くんだろうと思つたり。

■竹花：ショックを受けないようにしようと思ってたの？

◆育美：そうそう。そうやって自分を守って生きてきたかな。

「よく私たちが言ってしまうのは“ずっといるからねー”とかね」(竹花)

職員に言ってほしくないこと

■竹花：「私は勝手だなと思われてもしょうがないのは、よく私たちが言ってしまうのは「ずっといるからねー」とかね。」

◆育美：でもそれはね、言っちゃいけないと思うよ。それをどれだけ子どもが期待するかだよね。

■竹花：やっぱりそうじゃなかつたっていうことが残るの？

◆育美：たぶんね、信用できなくなることもあると思う。結局裏切るじゃんみたいな。それに慣れてくるんだよ。特に担当替えクロコロしてる子なんて絶対そうだと思うよ。そんなの家じゃないじゃん。

■竹花：そこら辺を育美のなかで克服するというか、信用できないみたいなどころは何か自分で感じていて、自分でこうしようっていうことは何がある？無理に信用するのをやめようっていうのを持ち続けるとかさ。

◆育美：なんだろうね、そうやって生活してきているからわからないかな。

■竹花：そっか、どうしたらいいんだろうね。

◆育美：でも、ふと考へるけどね。この生活なくなったらみたいな。たとえば、信頼してたらその人がいなくなったらなんて考えない。その辺も考へるからね。そうしたらその時点で信頼しないってなる。

■竹花：そうだね、信頼というのは最も難しいことかもね。いつの間にか信頼の反対の気持ちを植えつけてしまっていることだってあるわけだからね。育美の場合は、担当さんが寿退職って多かったよね。

◆育美：それはいいんじゃないかな。

■竹花：おめでとう！って感じでまた会いにきてくれる関係で。

◆育美：関係的にはそうだね。

■竹花：だからズバズバッと関係が切れていく感じではないよね。

◆育美：いないね。そんな人は一人も。

■竹花：じゃあそこら辺では良かったか。なんか無理矢理言っちゃったけど。

◆育美：いいんじゃない？

■竹花：だけど願いとしては、「ずっといるよ」って言わないでほしいんだ。

◆育美：うーん、時と場合によるのはわ

かるけど、辛いかな。その言葉の重みが変わってくるよね。そっちは何気なくボソッって言っても、あの子たちにとってはそれが大きかったりするから。その一言だけが。

お母さんのこと、自分に納得させた

■竹花：お母さんのこと聞いていいかな？4歳の時にお母さんと一緒にきて、よく泣く育美に泣かれることしか私は受けとめることができなくて、15年目になるんだけど…。

◆育美：そうだね。

■竹花：育美のお母さんへの思いは、幼稚園時代は結構表現していたんだよね。お母さんどうしてこないんだろうかと思ったことある？

◆育美：小学校かな。でも逆に言えばなんでこないんだろうじゃなくて、同じ年の子もこないような人たちばかりだったから、そういう意味では何とも思わないんだろうね。

■竹花：育美がなんで光の子どもの家にきたかというお話はお母さんからしてもらった？

◆育美：うーん。

■竹花：じゃあ話してもらったことは

覚えていない？

◆育美：記録を読んだ。

■竹花：そうなんだ。後からそういうことを話されたんだよっていうことを伝えられたことは、心の傷になっていない？

◆育美：なってないかな、逆にそれを読んだ時に、職員とかに申し訳ないことをすぐ言っているって思った。

■竹花：ハハハ、じゃあそれは短大生になってから読んだ？

◆育美：うん、びっくりした。こんなことを言われてたんだって。今は思うけど、絶対小3で理解できないだろうって。

■竹花：そうか、だけど心のどこかで理解したのかも。

◆育美：うん、吹っ切れたっていう言い方も変だけど、自分のなかでたぶん言い聞かせたんじゃないの。

■竹花：その次の日かなー担当さんから聞いたんだけど「もういい、育美ちゃんわかったから」って言ったって。いっぱい泣いて、周りが心配している時に「もうわかったから」って納得にもっていく自分の力がある。

◆育美：そう納得にもっていく、絶対

「情緒的な体験っていうの何か覚えてる？」(竹花)

もっていく、逆に納得できなかったら
いつまでも「なんで」って聞くかも。

■竹花：そのことがあった数ヶ月後に
私がもっと驚いたのは、育美が思春期
になっていく時なのかな、5、6年生かな？「私って必要とされているんだよね」
みたいなことを言ったんだよね。急に「わかった」って言うふうにニコッとする育美ちゃんがいた。

◆育美：あーでもそれは考え続けた
よね。未だにそこは考え続けるね。

お母さんと暮らしてみたけれど…

■竹花：育美がうちに帰るって絶対無理だと思ったんだけど、お母さん家に
帰る選択をしたのも、お母さんが言つたかも知れないけど、勧めた人がいる
わけではないし、自分で意志の力で決
めたんだよね。

◆育美：それを表現することができ
ない、結局たぶん言ったことは「あー
もうお母さん家に行くから」だから。
その辺の表現が未だにできないかも。

■竹花：お母さん家行くから、もう決
めたからって？

◆育美：そうそう、そういう言い方にな
っちゃう。

■竹花：その後でいろいろ「だってね」つ

ていうのも入らなくなっちゃうの？

◆育美：うん。それに対して「なんの」ってキレるかも。「だったら、ここにいろいろと言えばいいじゃん。そういう選択しか与えなかつたそつちが悪いんじゃないの」という言い方になっちゃう。でもここにいる子たちは帰りたくても帰れない子ばかりなのに、帰れるのに帰らない選択は、その子たちにすごく申し訳ないとも思った。

■竹花：一年もったんだよね。だからそれも、こちらの思いを超えていた。
それでお母さんと暮らしてみたことは実際どうだった？

◆育美：無理だね、フフ。お互いの我慢の連続。夏休み過ぎて自分がいっぱいいいっぱいで。ここに帰ってきたのも、これ以上いたら本当に関係が悪くなるって思ったかな。そこまでして一緒にいる理由もないかなって。

■竹花：お母さん家にあの時に帰らなかつたら、きっと一生帰れないという
思いがあつたんだろうね。短い間だけれども、帰れたことは良かったと思つてい
いんだよね。

◆育美：うん。

心に余裕がないと周りが見えない

■竹花：育美がよく泣いていた時に、

いつも隣で一緒にいてつい涙が出ちゃ
う場面がすごく多かったんだけど、今
はそういうのが減ってきたのかも知
れないね。

◆育美：泣く子がいないでしょ、ます。

■竹花：そうなんだ、泣く子がいない。

◆育美：感情的な問題なんじゃない。

■竹花：感情的な表現ってどうやっ
たらできるようになるの？

◆育美：うちにいる中学生は、たとえ
ば虹を見てどう思うって聞いたら「す
ごい」しか思わないで、「きれい」とは
思わないって言ってた。

■竹花：うちにいる中学生？「きれい」
と思わない？

◆育美：山を見てどう思うかって聞
いたら「別にきれいと思わないから、
登らなくていいと思う」とか、なんで
きれいって思わないのって感じ。その
辺の感情が理解できない。

■竹花：私が唯一自慢できるのは朝日
と夕日がきれいってことなんだよね。
星が見えるのはここだけなんだよ。

◆育美：あーきれいだね、星もきれい
だしね。でもそう思うことは心に余裕
があるってことなのかな。だから言え

ることかな。

■竹花：大きい子だから余裕がない
のかな。

◆育美：受験生だからかな。

■竹花：育美はそういう情緒的な体
験っていうの何か覚えてる？

◆育美：虹を見て「めっちゃきれ
いじゃん」って今でも思う。でも余裕が
なかつたら周りも見えないよね。自然
がここにあるってこともわかんない
よ。部活やってる時は帰りは夜で、朝
は眠いから周りなんか見てないし、土
日に「こんなに芝が緑になって生えて
る」って思うこと多かった。

職員はみんな言うことが違う

■竹花：育美は、卒園してまた戻つて
きてくれたけど、育美から見て今の生
活や大人の人への注文はありますか。

◆育美：周りの人が言いすぎだよ。言
うのは職員一人がいい。一人が言つ
て、一人がフォローしてくれたらいい
のに、何かみんなで同じこと言ってな
い？というか人によって言うことが
違いすぎる。これだけは同じにしてほ
しい。今やってることがいいか悪いか
なんてそんなの何年か後に出ること。
全然子どもたちを見てないし。

「虹を見て“めっちゃきれいじゃん”って今でも思う」(育美)

「育美は4歳からの生活が今の成長につながっている？」(竹花)

次の成長につながればいいんじゃない。

■竹花：今後の成長につながっていると思う？

◆育美：わかんないかな～。何年後に自分の役に立ったって自分で思えばいいんじゃない。

■竹花：育美は4歳からの生活が今の成長につながっている？

◆育美：じゃない？

子どもからたくさん学ぶ

■竹花：ここが家庭的でありたいと思ってもまた新しい子がくる。自分は甘えたいんだけど今は我慢しなきゃいけない時間が長くなったり、どこでそうだけど、結構入退所が激しいから。育美は一人になると寝れない子だったし、ちょっと申し訳なかったなって思ひはあるんだよね。

◆育美：下にもいたしー、仕方ないんじゃない？今、実習中の幼稚園にここ家の子どもたちもいて、いつも言うことを聞いてないのが見えるし、すごい「はずかしー」と思うよ。でもその子の下にまた妹や弟がいっぱいいるから、訳がわからなくなる気持ちはわかるし…。

■竹花：何か足りないっていうのはあるんだよね。

◆育美：みんなそうなんじゃない、この子は。

■竹花：もっとこうしてほしかったっていうリクエストはある？育美の見ている目というか、感じたことっていうのは、後輩たちにとってすごいんだと思うんだよ。

◆育美：うるさく言わないことくらいじゃない？なんかね、言いたいことはわかるけど、それなりに考えてるよ、中高生は。

■竹花：上の子は結構ね。小さい子どもたちはもうしょうがないよね。幼稚園なんだけど、まだ下がいるんだもんね。

◆育美：そう、仕方がない環境なんだよね。それを周りがどうカバーするか。職員が一人の子にばっかり目がいっちゃった時があったから、私がこっちに遊びにきた時は、別の子しか抱っこしないとかしてたし。

■竹花：あーなるほど。それを卒園生の育美がやってくれるっていうのは…。

◆育美：卒園生だけじゃないけどね、そこら辺を読み取れる今の子も必要じゃない。あーでも今の子は無理かな。

「じゃない？」(育美)

自分のことでいっぱいいっぱいだしね。

■竹花：育美がもう職員の立場で子どもを見る年になったんだよね。だからさっきの卒園生としての視点よりも、すごいなと思うよね。

◆育美：子どもから学ぶことってたくさんある。だからなんとも言えないよね。毎日が勉強じゃない？同じ生活をしているんだろうけど、やっぱり発見は違う。

■竹花：そうだよね、だって子どもって毎日変わってるよね。

◆育美：変わる変わる、子どもの一日はめっちゃ長い。というか大きいよね、うちの一日とは違って。

■竹花：今、うちらって同じにしてくれた、ハハハハハ。

自分の子どもはほしい

■竹花：育美はもう少ししたら、自分で家庭を持ちたい気持ちはありますか？子どもはほしい？

◆育美：うん。

■竹花：いつごろからそう思うようになってきたの？

◆育美：ずっとかな。子ども好きだから。家庭を持ちたいより子どもがほしい。でもそのためには家庭築かなければまずいじゃない。

■竹花：うちにいた未婚の母が出産することを育美は反対したんだよね。自分みたいな思いをさせたくないって。私その言葉を聞いて、この子は産まれてきて良かったっていう生活を絶対させるって思った。育美にそう言われたいから。だから育美が結婚して、子どもを育てられるようになるのを見るのは、ちょっとした私の目標かな。

◆育美：その目標が達成されるのは遠いなー、ハハハハ。



「余光」

菅原 哲男（光の子どもの家 創立者）

鷹緒からの無心は数え切れない。数日前、彼の携帯電話の累積使用料4万余円の督促状の金額に5万円を渡したばかりだった。

鷹緒は4歳の秋、嬉と共にやってきた。盛り上げ屋の鷹緒と無口な嬉は、子どもたちの中で好一対だった。幼稚園中は順調に成長した。小学校は課題の克服が日常になる。ついて行けない鷹緒は、だじやれを言うなどでクラスの位置を保った。庭整備をして夏休みは赤岳により登り、困らせながらも概ね楽しく暮らした。しかし中学では不器用で取り柄のない鷹緒は、家から何かを持ち出して級友に与えることで存在を保とうとしたようだ。中2の時、深夜光の子どもの家の事務所から百数十万円を盗んだ。中学校の校門でニコニコしながら登校する級友たちに万札を配っていたのだった。

ある研究会で出会った菅野圭樹児童精神科医が、休診日にクリニックから光の子どもの家に駆けつけて、面接した子どもたちへの職員の関わりについてのアドバイスをして下さっていた。菅野医師に診断と関わりについて相談をした。鷹緒はADHDや、人格障害と診断されて、数々のトラブルの日々の後高3の秋、すがのクリニックに入院した。そこでも、しばしばの大金の盗難で地方の刑務所に服役したのだった。

刑を終えた鷹緒は約300キロの道を光の子どもの家まで歩いて、道々多くの人から支援されてたどり着いた。病後のこともあり光の子どもの家の近くの都市で生活保護を受けてひとり暮らしをして30歳余になっている。

鷹緒は職員会議の日の朝に来た。聞くと、芸能プロダクションに入り、

その入会料が50万円、契約書の連帯保証人欄には私の名前が書いてある。金は与えないで帰した。私に金を借りに来ることは、他の誰にも借りられない事情を託つものだろうと思、大概無理をしてでも必要な金を用立ててきた。事務所に「たぶんわたしは誰からも必要とされていないのでしょう。本当に一人ぼっちになりました。親みたいに育ててくれてありがとう。会ってくれて嬉しかったです。今度は、先生の子どもに生まれてきたいです。」等、鷹緒の幼い字で書かれた封書があった。

いくつになっても帰ってくる…そんな実家を願った。何とも足りないはたらきをしみじみ感じさせられ、眠れない夜を過ごした。

数日して、芹沢俊介自立進学基金理事長に、電話でこんな事もあって難渋していると相談をした。「それは

大変だね。基金のお金、そういうことにも使っていいと思うよ」といわれた。しかし、彼には自立のめどは立っていないことを伝えると「最後のよりどころになることがその人に必要なのだろう、使っていいと思うよ」と芹沢理事長はいった。

定員36名の小規模な光の子どもの家でも、毎年子どもを社会に送り出し続けている。基金を必要とする者が拡大し、社会的養護の貧しさだけが迫ってくる。このところ目減りし始めた基金に、刀川和也監督のドキュメンタリー映画「隣の人」を見た人たちからの支援が加わり、何とかしのいでいる。

感謝

financial report ●●● 会計報告

光の子どもの家 自立進学基金

2016年7月15日(金)

2015年度募金総額 1,639,564円

2015年度支出総額 3,601,449円

※支出内容：専門学校学費、大学学費、生活費

残高 12,332,573円



感謝と共に

光の子どもの家自立進学基金が設立されて7年が経とうとしております。これまでに17名の卒園生たちへ、当基金から必要な金銭面をフォローしていただき、卒園後のアフターケアを適宜実現してきました。児童福祉法は18歳の誕生日を基本的な措置満了日として定めており、それ以降の措置は延長という扱いになります。児童養護施設で暮らす子どもたちは、高校在学中であっても18歳を迎える前に措置延長の意思確認と延長願などの手続きをしなければなりません。

彼らのために作られた児童養護施設で暮らしながら高校を卒業するために、高校在学中であってもここにいたいという意志を確認され、そのための書類手続きが必要であるという現実があります。高校卒業後も進学のため、就職後も安定するまでなど様々な理由で

●●● financial report



措置延長制度は利用できます。しかしその措置延長でさえ、児童福祉法では20歳の誕生日の前日までしか利用できません。仮に大学在学中であっても措置は切られます。また4月の誕生日の子もいれば3月の誕生日の子もいて、同じ年度の子でも最大12カ月の措置の差があり、とても公正な制度とは言えない状況です。

ただでさえ厳しい環境で何とか命を繋いできた子どもたちが、彼らの育ちを保障するための社会福利制度が持つ厳しさに否応なく晒されながら、社会的自立を迫られる困難さが、現代日本に確かにあります。自分の将来に希望を抱き、目標のために進学や資格取得を志した時、「光の子どもの家自立進学基金」は彼らにとって大きな後ろ盾となります。私たちのみでは到底かなわない部分を担ってくださる多くの皆さんには心から感謝しております。これからもご理解とご協力をよろしくお願ひいたします。

twinkle light...

...twinkle light

『かくれんぼ』

作詞 林柳波
作曲 下総院一

かくれんぼするもの

よつといで

じゃんけんぽんよ

あいこでしょ

もういいかい

まあだだよ

もういいかい

まあだだよ

もういいかい

もういいよ

JASRAC 出 1114186-101



下総 眺一(しもふさ かんいち・1898.3.31 ~ 1962.7.8)作曲家・音楽教育者。北埼玉郡原道村砂原(現・加須市)生まれ。ドイツ留学後、母校の東京音楽学校(現東京藝術大学)の音楽部長を歴任。教え子に田伊久磨、佐藤真、芥川也寸志らがいる。全国の小・中・高等学校校歌や童謡の作曲も手がけ、総作曲数は 1200 曲にのぼる。代表作には「たなばたさま」「はなび」「野菊」「電車ごっこ」などがある。

◆光の子どもの家の近隣に位置する「おととね童謡のふる里室」には、彼が作曲した全国の校歌を中心とした数々の資料が展示されている。

光の子どもの家 自立進学基金

児童養護施設、光の子どもの家は1985年7月に生まれました。それから27年、およそ100名の子どもたちがこの家で暮らし、みんなが家族となって、ともに笑い、怒り、泣き、喜びあいました。子どもたちと離れて暮らす家族にも心をかたむけ、子どもたちと家族の絆を大切にしてきました。光の子どもの家が誕生したときは、地域の人たちからの理解が得られませんでした。けれども今では、地域の人たちは、子どもたちをいつも温かく見守ってくれています。時間をかけて、地域とのつながりも育んできました。

子どもたちが、社会に出てからもがんばりたいことをがんばり、自分が信じた道を歩めるようにと願い、子どもたちが高校に進学できるようにと、力を注いできました。これまで、光の子どもの家から中学校に通って、卒業した子どもたちは、すべて高校生になりました。子どもたち自身の力と、職員たちの見守り、ご寄付の応援があったからです。

今は全国的に、高校を卒業すると、2人に1人以上が大学に進むようになりました。けれども、児童養護施設で暮らす子どもたちが大学に進めるのは、10人に1人もいません。

家族と暮らす全国の18歳の子どもたちのように、光の子どもの家でも、大学や短期大学、専修学校などに進んで学びたいと望む子どもたちが増えています。夢を実現しようと、新聞配達をしながら、大学に通った子どももいました。けれども、その多くは、学業と厳しい仕事との両立に苦しみ、途中で大学をあきらめるしかありませんでした。

18歳になると、社会に出る準備をあと少し光の子どもの家でしたいと思っても、国の制度により、国や県からの支援が受けられなくなります。保護者や親戚などからの援助も、奨学金も受けられないなかで、生活への不安がどんどんふくらんでいきます。職員たちは、親の気持ちになって、子どもたちを心配し、経済的な支援をしてきました。しかし、子どもの数が増えたため、それだけでは、追いつかなくなっていました。

光の子どもの家自立進学基金は、光の子どもの家から、社会へと巣立っていくために、暮らしが守られ、学びが続けられ、子どもたちが自分の生きる道に、希望の光が見出せるようにと、祈りをこめて設立しました。みなさまの子どもたちへの愛は、子どもたちの心のなかで、自分の人生を生きぬく勇気になっていくと、信じています。どうぞご協力をお願いいたします。

皆様のご協力をお願いいたします。

光の子どもの家 自立進学基金

郵便振替口座番号 00150-4-377679

「光」第1号 2011年11月3日発行 第1版
2016年 8月3日発行 第3版

発行人 芹沢 俊介

編集人 箱崎 幸恵

編集デザイン 八木 久美（テナポコーポレーション）

撮影 達川 清

連絡先 社会福祉法人
児童養護施設 光の子どもの家

〒349-1155 埼玉県加須市砂原 277 TEL 0480-72-3883 FAX 0480-72-6649

hikarikikin@yahoo.co.jp <http://www.hikarinokodomonoie.com>